

山と博物館

第44巻 第2号 1999年2月25日

大町山岳博物館

開催にあたって

松本 恵美子

女性の身近な手芸から始まったパッチワークキルトも、現在では全世界共通のアート・工芸として注目されて参りました。当教室（キルト糸車）は一九八五年、ここ大町教室から始まり、第一回作品展を大町文化会館でさせて頂きました。現在、長野三教室・上田・白馬村にて教室を開講させて頂いております。会員数八五名、過去、県民文化会館・上田西武デパートe.t.c. 七回の作品展を開催。毎回二〇〇点の作品をご高覧頂いております。ようやく会員の中から国内・国外のコンクールにも入選・入賞者が出るようになり、より一層作品への意欲も増して参りました。そのような中、教室開講一四年目にして市立大町山岳博物館のご厚意を賜り、私どもの作品を企画展として開催して頂ける運びとなりました。小さく裁

った布を一针・一针とつぎ合せて作り上げて行く地味な手作業、根気のいる手仕事と思わぬ模様を醸し出す、そして絵画にもなっている、このキルトの世界。

大町市は私の出身地ではありますが、この地を離れて早三〇年余り、当地で作品展を開催して頂けるといふ喜び、今回大町市のシンボルであり、ライチョウ・カモシカ・オオヤマザクラ・カタクリの花を入れた作品『七八名の山のいぶき』（たて二七五cm・よこ一七五cm）を中心に、自然をテーマにした作品八〇点をご覧頂く方々それぞれが思い思いに感じて頂ければ幸いです。

（キルト糸車主宰、長野市在住）



『78名の山のいぶき』

企画展「キルト糸車 パッチワークキルト展」

— 岳光る 風のささやき 布遊び —

3/20(土)～4/4(日)

「ライチョウを語る会」基調講演【その一】

期日 平成一〇年八月二十九日
会場 大町建設労働者研修センター
主催 大町山岳博物館ライチョウを語る会実行委員会

大町山岳博物館編

『ライチョウの生活』

中村浩志

1、はじめに

私がライチョウの研究を始めたのは今から二〇年ほど前のことです。信州大学を卒業した後、京大の大学院へ行きました。信州大学へ戻ってきたときに、羽田健三先生が最後の研究として、日本のどの山にどのくらいのライチョウがいるかを調べたいというお話でした。北アルプスはほぼ半分終わっている。だから、残りの北アルプスと南アルプスのライチョウについて調べてみることにしました。以来、毎年学生たちと一緒に何回となくライチョウ調査にアルプスへ登りました。

今日お話しすることは、羽田先生が調べられたことに私が調べたことを加えて、日本のライチョウというのはどういう鳥なんだろうということをお話ししたいと思います。

2、ライチョウとは

ライチョウとはどんな鳥かという点ですが、日本では本州中部の高山にのみ生息する鳥です。一九五五年に国の特別天然記念物に指定されています。また、長野県の県鳥でもあります。ライチョウの特徴を一言で言ったら、「寒い気候に適応した鳥」だということです。ライチョウは、足の指先まで毛で覆われて

います。それから非常に鋭いくちばしと爪を持っていて、雪や氷をかかためです。それから、冬にはご覧のように真っ白に衣替えをします。さらに冬は雪穴を掘って、その中で寝るのです。そして、翌朝のぬぐらの穴にこのように糞が残ります。このようにライチョウの一番大きな特徴というのは「寒い気候に適応した」という点にあります。

ライチョウの住む場所は皆さんご存知のように高山です。標高三、〇〇〇mを越えた地域に行きますと、もう木は育ちません。そういう環境でライチョウは生活しています。高山帯という環境がいかに厳しい環境であるかということ、この写真が如実に物語っています。これは北アルプスへライチョウ調査で登った折に尾根筋で見つけたカラマツです。カラマツというのは皆さん良くご存知のように、平地であったら真っ直ぐ伸びて二〇m位に生長する木なのです。しかし、高山帯に芽生えたカラマツは、強い風、それから寒さによって真っ直ぐ上に伸びません。それから、何百年かかけてここまでようやく地面をはうように生長してきたというわけです。こういう姿を見ると、動物を研究している私たちは非常に感激します。植物はまさに体で生活を表

現しているということです。

3、ライチョウの種類と分布

次にライチョウはどんな分類学的な位置にあるのかというお話をしたいと思います。皆さん良くご存知のように、似たような「種」を集めて「属」というグループにまとめ、さらに似た「属」を集めて「科」にまとめ、似た「科」を集めて「目」というように生物を分類するわけです。

その分類によるとライチョウという鳥は、キジ目のグループです。キジ目の中でさらにライチョウ科、さらにその中のライチョウ属のライチョウです。

世界にはキジ目の鳥は六科七五属、二六三種類生息しています。日本では、キジ目の鳥は二科六種が生息しています。世界にはライチョウ科の鳥は全部で一九種います。そのうち二種が日本に生息しています。ライチョウ

とエゾライチョウです。後者は、日本では北海道にしか生息していない鳥です。ライチョウは高山に生活していますが、エゾライチョウはもっと標高的には低い、針葉樹林に住むライチョウです。

ライチョウの学名は「*Lagopus mutus*」と名付けられています。「ライチョウ」というのは日本の正式の名前で、カタカナで書きま

サギの足」という意味です。日本のライチョウは日本語で「ニホンライチョウ」といいますが、ラテン語では「*Lagopus mutus japonicus*」で、全部で二八亜種に分かれるライチョウの一亜種です。

ライチョウ科の一九種は、北半球の温帯から亜寒帯、寒帯にかけて分布します。その中でもライチョウは最も北に分布し、アラスカからアメリカ大陸の北部、それからヨーロッパの北部、ソ連邦の北部にかけて分布しています。

日本では本州中部の高山帯に限って分布し、



「ライチョウを語る会」

(H.10.8.29 大町建労研修センター)

ほかの地域のライチョウとは完全に隔離されています。カムチャツカ半島と、それに続く千島列島の途中までしかライチョウは分布していません。それから樺太にもいません。このように日本のライチョウといのは、世界のライチョウから完全に隔離されているわけです。しかも、世界で一番南に分布しています。これが日本のライチョウの非常に大きな特徴です。

4、ニホンライチョウの特徴とその生活

ここでニホンライチョウの特徴について、いくつか挙げたいと思います。まず、今言いましたように、「世界のライチョウの最南端に分布する」ということです。

氷河時代は気候が今より寒く、氷河がもつと南の方にあり、その後、氷河がだんだん北へ退いたときに、高山に取り残されたのが日本とかヨーロッパアルプス、あるいはピレネー山脈に隔離分布されているライチョウなのです。

そのためニホンライチョウというのは高山に取り残された「氷河期遺留動物」、あるいは「遺存動物」という言い方をされています。それから、「人を恐れない」という特徴です。ライチョウの写真を撮るときに、少しづつゆっくりゆっくり近づけば1mの距離まで近づくことができます。日本のライチョウの非常に大きな特徴は、後でふれますが人を全く恐れないということです。日本の中でこのような鳥はライチョウ以外にいません。

高山で日本のライチョウ、ニホンライチョウはどんな生活をしているのかということをお話したいと思います。冬、高山は雪で覆われます。この時季、ライチョウたちは高山から少し下がった亜高山帯まで一部は下り、群れで生活しています。そして、雪解けが高山から始まると、次第に群れが亜高山帯から高山の方へ移動して行きます。その頃になると、群れの中の雄同士が争い行動が活発になります。雄同士が争って、一般的にいうと、雪解けの早い高山の高いところから低い所へと順番に縄張りを確立していくといわれています。そして、縄張りを雄が確立した後、つがいができます。

つがいができるとこの写真のように、雄が雌に絶えず付き添って行動します。そのうちに、雌が背の低いハイマツの下に巣を作って卵を産みます。卵はだいたい五卵から七卵位

産みます。そして、この卵を温めるのは雌だけです。そして、雌は朝と夕方の二回だけ餌を探るために巣から離れます。そのときには、雌を雄が護衛します。雌が抱卵している間、雄はもっぱら縄張りの護衛にあたっています。

しかし、雌が孵化しますと雄はその縄張りを解消して、子どもと雌を置いて群れ生活に入るといわれています。孵化した雌が雌親と

ウの一年間の生活です。

5、一夫多妻のライチョウ

ライチョウというのは一夫一妻の鳥というように言われていました。しかし、南アルプスの塩見岳を調査しているときに、偶然の機会に一夫多妻のライチョウを発見することができましたので少しお話ししたいと思います。

調査中の夕方、雌が巣から飛び出したすぐ後を雄が追ってゆき、雌が三〇分くらい餌を食べながら巣に戻るのを確認しました。その後、もう一羽の雌が飛び出してくるのを見つけた。その雌の後を同じ雄がずっと護衛し、雌が巣へ戻るともとの見張り場所へ戻るのを観察しました。

ライチョウについて具体的な調査の話などをまじえて講演する講師



二つの巣は近い距離で、一〇〇mもありません。その距離で二つの巣があるということは少しおかしいというところで、学生たちに詳しく調べてもらいました。ライチョウの鳴声をテープレコーダーで鳴らすと、それを聞きつけた雌はすぐ跳んできます。少し離れたところで同じことをやると、また跳んできて反応する。しかし、全く攻撃に來なくなる場所があります。そこが縄張りの境界です。ということは、明らかにひとつの雄の縄張りの中にふたつの巣があり、どちらの雌とも雄は関係を持っているということです。間違いなく一夫多妻であるということが分かりました。

6、ライチョウの食物

では、ライチョウは一体どのようなものを食べて生活しているんだということを話したいと思います。

冬の時季は高山帯から下の亜高山帯の針葉樹林まで下りてきて、ダケカンバとかのいろいろな植物の冬芽を雪を掘り起こし、場合によっては針葉樹の葉まで食べて生活しています。そして、雪解けとともに高山で雪が解けてなくなった場所を中心に爪で雪、氷をかいて高山植物を掘り出して食べています。

雪解けの終わった六月の山、ちようどキバナシヤクナゲの花をつけています。ライチョウはそのキバナシヤクナゲの花を食べます。この時期、こういった環境でさまざまな植物が芽吹いています。そこで、葉っぱが出たら葉っぱを、花をつけたら花を、実をつけたらそれを、種をつけたら種を、四季を通して高山帯に見られるさまざまな高山植物を食べて生活しています。ですから、ライチョウは基本的に草食性です。そして、時々ミミズとか昆虫も食べます。

ライチョウの好物はクロマメノキです。それからチングルマ・オヤマノエンドウは、葉も花も種も食べます。さらにチウノウスケノウ、タカネマテマ、ミヤママンネングサ、ミヤマムラサキ、トウヤクリンドウ、チシマリンドウ、タカネシオガマなどです。こういった高山植物を食べて生活しています。日本の高山というのはヨーロッパの高山に比べて非常にきれいな花が見られるという特徴があります。

7、ライチョウの縄張り数

羽田健三先生を中心にどんな調査をしたのかといいますと、先ほど言いましたように、日本のどの山にライチョウが何匹いるかということ調査したわけです。

山小屋が開いていない時期から学生を四、五人連れて登って、だいたい一週間かけて調査します。残雪が多く残っていて、非常に危

ともに家族連れで、夏の時期を過ごすわけですから、わずかに三ヶ月で秋の時期が来ると、この小さな雌が親と同じ大きさまで成長します。秋になると山一帯のライチョウが集まり、秋から冬はまた群れ生活に戻るといって生活しています。これが大雑把なライチョウ

険なハードな調査になります。登山道歩き
ているだけでは調査になりません。登山道が
あるとなかろうと、ライチョウが棲むハイ
マツ帯より上の高山帯をくまなく歩き、上つ
たり下りたりして、どこに何羽のライチョウ
がいるかという調査をしました。

ライチョウは繁殖期になると縄張りをもち
ます。その縄張りを数えることによって生息
数を明らかにしようという調査です。しかし、
全部の地域を繁殖期に調べ回るのは労力的に
無理だから一部は繁殖が終わった夏の時期に、
環境から縄張りを推定する方法を取りました。
繁殖期の調査では、岩の上で縄張りの見張り
をしている雄など、できるだけ多くのライチ
ョウを見つめます。ライチョウの糞、羽根が
あると、そこにライチョウが生息する証拠に
なります。ライチョウの雌が抱卵中は普段よ
りずつと大きな糞をします。抱卵中、雌は朝
夕二回しか餌を食べに出ませんから、その時
に非常に大きな糞をします。ですから、新鮮
な非常に大きなライチョウの糞があれば、そ
こにいる雌はいま抱卵中だということを示し
ています。

それからライチョウはキジとかニワトリの
仲間ですから、砂浴びが大好きです。砂浴び
をした後に必ず羽根が落ちていきます。こうい
うライチョウの生活痕跡をできるだけ見つけ
て、それを地図上にプロットしていきます。
それをもとに、それぞれ山に何個のライチ
ョウの縄張りがあるのか調べていきます。
これは、南アルプスの塩見岳周辺、北岳岳
周辺、甲賀岳周辺を調べたときの結果です。
塩見岳周辺には七つの縄張りがあると推定さ
れました。巣は一つだけ見つけました。抱卵
糞は全部の縄張りで見つけました。争い行動
とか、生活痕跡を根拠にして、塩見岳にこれ
だけの縄張りがあるということを推定したの
です。

こうした調査をいろいろな山で繰り返して
ないました。北アルプスの白馬、杓子岳から

白馬鍾ヶ岳天狗の頭にかけての縄張り分布で
す。北アルプスでは白馬周辺に非常に多いで
す。南アルプスでは北岳、農鳥岳、間ノ岳、
いわゆる白峰三山に多くのライチョウが生息
することが分かりました。

このような調査を実に一五年かけて繰り返
しました。その結果から、日本のライチョウ
の分布の北限は新潟県火打山、焼山です。一
番南は南アルプス光岳のすぐ近くのイザル岳
が分布の南限です。そして、分布の中心は、
朝日岳から穂高岳にかけての北アルプス。計
七八四縄張りあるのが分かりました。

それから、その周辺の乗鞍岳に四八、御岳
山には五〇、火打山、焼山には一〇、南アル
プスの甲斐駒ヶ岳から光岳では、二八九の縄
張りがあると推定されました。

8、ライチョウが絶滅した山と移殖の試み

ライチョウが絶滅した山岳もあります。そ
の代表が中央アルプスの駒ヶ岳です。その近
くの西駒ヶ岳にはかつてライチョウがいたの
です。それが昭和四〇年のはじめにロープウ
エイを架けたのがきっかけで、その後わずか
数年で中央アルプスからライチョウは姿を消
しました。安易な開発がいかに取り返しのつ
かない結果を生ずるかという、長野県自然
保護の歴史の中に非常に大きな汚点を残すこ
とになりました。

そのほかに江戸時代以前の文献から白山、
それから蓼科山にもかつては生息していたと
いう文献記録があります。しかし、現在は生
息していません。白山、蓼科山いずれも分布
の中心から離れた地域にあります。

それから移殖の試みが二例あります。富士
山への移殖。これは一九六〇年に北アルプス
の白馬岳より、雌一羽、雄一羽、幼鳥四羽、
計六羽を持って行って富士山に放したわけ
です。その後、一時的に増加しましたが、一〇
年後には絶滅してしまいました。

それから金峰山。ここに一九六七年に南ア
ルプスの北岳からライチョウの雌二羽、雄三
羽、計五羽を放しました。これも一〇年後に
は絶滅したのです。

中央アルプスは北アルプスと南アルプスに
比べると、やっぱり山は小さいといえます。
つまり、ライチョウは周辺の小さい山からど
んどん絶滅している。さらに、周辺の山にラ
イチョウを放鳥しても、定住できないという
のが現状です。

9、推定されるライチョウの生息数

先ほどのライチョウは一体どのくらいの数
が生息するかというのを推
定してみました。これがそ
の結果です。北アルプスに
は七八四(朝日岳・穂高
岳)の縄張りがあります。
その周辺には一〇八(乗鞍
岳四八、御岳五〇、火打山
と焼山一〇)の縄張りがあ
ります。南アルプスには二
八九(甲斐駒ヶ岳・光岳)
の縄張りがあります。

爺ヶ岳の調査の結果、雄
三羽のうち一羽はつがい
にない、あぶれでいるこ
とが分かりました。一つの
縄張りには、つがいの雌雄
の他に〇・五羽のあぶれ雄
がいることになりました。そ
のため、縄張りの数を二・
五倍したものがライチョウ
の数ということになります。
ですから、ライチョウの生
息数は約三、〇〇〇羽(一
八一×二・五=二九五
三)と推定できます。

しかし、これはあくまで
も推定数です。先ほど話し

ましたように、調査を一五年かけて行ない
ました。だから、はじめにやっていた頃の山は
もう減っているかもしれないし、逆に増えて
いるかもしれないです。この調査は今から一
五年前の結果です。今どうなっているかは分
かりません。それから先ほど言ったように、
爺ヶ岳の調査から雄三羽のうち一羽があぶれ
ていると推定しました。しかし、ほかの山岳
でもそうだとはいけません。一夫多妻のライ
チョウもいます。しかし、この三、〇〇〇羽
というのはそんなに現実とかけ離れていな
ない数だろうと考えています。



スライドをまじえた講演を熱心に聴く参加者

10、海外のライチョウ

今から五年前に、アリューシャン列島へ登山学術調査に行く機会がありました。ご存知のように、アラスカ半島から円を描くように、火山によって島が繋がったものがアリューシャン列島です。ここに夏、調査に行きました。この地域にはライチョウが生息しているということから、その調査に参加しました。

このアリューシャン列島のライチョウを見てびっくりしたことがあります。日本ではライチョウが人の姿を見ると飛んで逃げるといことは全くありません。それが向こうのライチョウは人の姿を見ると五〇m先から飛んで逃げる。日本人はライチョウは飛ばない鳥だと思いがちですが、日本のライチョウでもいざついでときには飛びます。繁殖期にあぶれ雄が進入したときなんかは、一〇分くらい追いついて飛びます。そういうことは知っていましたが、人の姿を見て逃げるライチョウにはびっくりしました。日本ですと、ライチョウの写真を撮るときに望遠レンズはいいですね。ゆつくりと近づくと十分標準レンズで撮れるわけです。しかし、向こうのライチョウは持つていった一、〇〇〇mmの望遠レンズを使ってようやく写真を撮ることができました。全く人に対する警戒心が違うわけです。こういうことを知って、日本のライチョウというのは極めて特殊なライチョウであることに気が付きました。日本以外の多くの地域では、人間によって狩猟されたという長い歴史があります。地域によっては現在でも狩猟の対象になっています。

しかし、日本では高い山にいるライチョウというのは信仰の対象として崇められてきて、捕獲は行われてこなかったのです。だから、日本のライチョウは人をおそれないのです。アリューシャン列島に行くと、手付かずの自然というのはこんなに素晴らしいのかというように感激しました。夏の時季にわっと雪が解けるといろいろな植物が花をつけて、動物

が繁殖する。短い夏をいろいろな動植物がいっせいに謳歌する華やかさを感じます。

11、日本の文化とライチョウ

日本の自然の景色というのは非常に美しい、世界に誇れるものだと思います。世界の多くの国がいわゆる牧畜民族です。その中で日本の大きな特徴といえるのは農耕民族です。日本の自然の本来の姿というのは、日本は一年中雨が多いため森の国です。その森の国の中を大小の河川が流れ、いたるところに湿地とか湖をつくっていたというのが日本の本来の姿です。縄文時代まではその自然を利用し、生活してきたわけです。それが弥生時代に大陸から稲作文化が伝わった結果、平地に水田を作りしました。水田は大勢の力を合わせなければできませんから、水田の周りに集落を作ります。集落全体をまとめるために、神社を祭りします。そして、その周りの山、いわゆる里山は家を建てたり、薪炭林として大いに活用しました。しかし、奥山の森には手をつけませんでした。水を確保するために奥山に手をつけてはいけないということを経験的に知っていたわけですから、ですから、こういった奥山に神を祭って人が入るのを制限し、まして高山のライチョウを獲ることをしなかつたわけです。

今でも昔からのきれいな風景を各地で見ることが出来ます。これは長野県の一帯の栄村です。千曲川があって水田がある。里山があつてその奥に雪の山がある。これは戸隠山です。この地域では戸隠神社を祭って、奥山を大事に守ってきたわけです。

日本のライチョウというのは人を怖れない。その理由は、日本の文化そのものの産物であるということにアリューシャンのライチョウを見て気が付きました。

12、地球温暖化の影響

三年ほど前にイギリスへ一年間行く機会が

ありました。その間に、スコットランドにライチョウがいるということで調査に行きましたが、ついにライチョウを見ることはできませんでした。山の上まで羊を放してはまずからライチョウがいてもほんのわずかなのです。それに比べて日本のライチョウは非常に高密度に生息しています。

五年位前にはカナダへ行く機会がありました。その折にカナディアン・ロッキーを訪れました。これはカナディアン・ロッキーの中心に位置するバンフという町です。日本でいっただら上高地のようなところですが、バンフとジャスパーのちょうど中間の場所に、高速道路からすぐ氷河の見られる場所があります。その氷河を見学した後、近くのホテルへ戻ってびっくりしました。絵葉書を見たところ

今見た氷河の先端の位置が絵葉書のものといふぶん違い、ずれているのです。なぜかと聞くこと、氷河は年々後退しているという事です。日本には今は氷河は残っていません。ですから、地球温暖化ということがあまり深刻に感じません。北アメリカ、そしてヨーロッパのアルプスの氷河では目にみえる形で年々後退していています。

この事実を目の前に見て、日本のライチョウのことを思いました。このまま地球温暖化が進めば、日本のライチョウはどうなるのかと非常に深刻に受けとめてきました。平均気温が一、二度上がっただけで、日本の高山帯の面積がずっと縮小されてしまうからです。

13、ライチョウの将来

現在、日本に生息するライチョウの数は大体三、〇〇〇羽です。しかし、この三、〇〇〇羽という数は、はたして多いと考えるとよしうか、少ない数ではどうか。動物が安定した数を維持するには最低数一、〇〇〇個体必要と言われています。一、〇〇〇個体はないと健全な子孫を維持できなくなります。

そういう観点からすると、南アルプスのライチョウは一、〇〇〇個体をすでに割っています。ですから、まず南アルプスのライチョウが心配です。

専門的な言葉で「ボトルネック効果」、「瓶の口効果」ということが言われています。瓶の中にさまざまな色の違う玉が入れてあると考えます。黄色とか赤とか青とかです。その中から二、三個の玉を取り出します。それらの玉は赤であったり、黒であったり、特定の色の玉しか取り出せません。

ですから、数がたくさんいるときには、いろいろな特徴のある個体がいるから安心なのです。それが数が減ってくると、特定の遺伝子を持った個体だけになります。そうなるといわゆる近親交配の弊害など、さまざまな問題が出てきます。

三、〇〇〇羽という数は、現在増えているのか、減っているのか、不確かなことです。先ほど富山の方から「ライチョウの数は安定している」というお話で安心しました。しかし、日本のライチョウというのはまさに風前の灯火のような存在です。このライチョウを今後日本のアルプスに残すにはどうしたらよいのかを真剣に考えることが今必要です。コウノトリやトキの二の舞を踏まないためにできるだけのことをして後世に残していけたらと思います。

そのためには、もっと現状把握が必要であり、もっといろいろな研究者が力を合わせ組織化した研究を進める必要があります。それから、ライチョウの素晴らしさをもっと一般の方々に知っていただかないと、あと五〇年後、一〇〇年後にアルプスにライチョウが残っているかどうか非常に心配です。

今回の会議を通じて多くの人の知恵と力を結集して、ライチョウの将来を考えていきたいと思っています。

(信州大学教育学部教授)

学社融合を考える①

片山 寛

三年程前から「学社融合」という言葉が社会教育の場で急速に普及しました。博物館はもちろんのことです。以前から「学社連携」という言葉もあるため、学校と社会の協力関係を「学社連携・融合」ということが多くなりました。しかし、「連携」と「融合」に境界を引くことはできませんが、「学社融合」は明確な方向性をもった手法であり、考え方は、それについてお話しする前に、学校教育の枠組みの変更にも大きくかわってくる事例を見てみましょう。

九八年の秋に兵庫県で始まった「地域に学ぶトライやる・ウィーク」が、大きな話題になりました。県内の公立中学校二年生約六万人が、地域社会で一週間にわたって体験学習をするという試みです。

先駆的な試みとしては、やはり兵庫県内の神戸市立長田中学校が九八年の三月に二年生の三日間の体験就職「スリーデイ・チャレンジ」を実施しています。

東京都武蔵野市の小中学校は「セカンドスクール」という宿泊体験学習を九五年から行っています。少年自然の家の利用やホームステイなどによって、小学校では六泊七日、中学校では四泊五日の「セカンドスクール」を行っています。

これらのうち、「セカンドスクール」については校長先生や受け入れ施設の職員の方の話を聞く機会がありました。▽最初の三、

四日は家に帰りがたり不安定で、終わってみると「よかった」という感想をもつようだ。▽一泊二日では子どもが能動的に動き出す期間としては短い。指導者主導のプログラムにならざるを得ない。▽一泊二日の日程の中で学校は行事を詰め込み過ぎる。受け入れ側の社会教育の施設としてのアプローチも大事にしたい。▽人気ベストワンの時間は、探検など自由に自然体験ができる時間、などの話がありました。

「トライやる・ウィーク」は主に特別活動の時間を集中的に使い、学校の授業として行われます。「セカンドスクール」も学校のカリキュラムの中で行われます。

これまでに多くの学校で、一日の体験学習や一泊二日の宿泊体験活動が行われています。が、月二回の学校五日制の今日、それだけでも時間を確保するにはかなりの工夫が必要です。にもかかわらず学校教育の中の体験学習の重要性は、ますます強く認識されてきています。したがって、十分にやろうとすれば長期休業中や土・日曜日、放課後などに行う課外活動が学校外活動でしかできなかったことを、兵庫県や長田中学校、武蔵野市が学校の正規の授業として行ったことには重大な先駆性があります。

学社融合の主要な方向性は、このような先駆的な発想と方法から学び、社会の中での体験学習を学校教育に位置付けていくことです。

このような事例で、関係者自身が学社融合という用語を用いて事業を語ることはないかもしれない。「セカンドスクール」の場合、検討が始まったのが八九年、その後三年間の試行期間があったといえますから、

そのころはまだ学社融合という用語さえなかったのです。大事なのは子どもたちの学習に対する大人の意識の持ち方や発想の仕方の転換であって、それが学校や社会はもちろん、家庭にも求められています。

今回は、学社融合について、もう少し具体的な角度から述べてみます。そして、例えば博物館と学校が協力し合って授業として子どもたちの学習が成立する可能性などを考えるきっかけにしたいと思います。

(大町市教育委員会生涯学習課生涯学習係)



博物館の展示について学芸員から説明を聞く子供達
H.10.5.29 大町北小学校3学年社会見学(学校融合モデル事業)より

山と博物館第44巻第2号

発行、〒長野県大町市大字大町八〇五六一
大町山岳博物館

TEL 〇二六-一三二一〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七三三九三